

NEW JAPAN  
*P* HILHARMONIC  
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団  
2024/2025シーズン

6

June, 2024



CHARLES DUTOIT



JADER BRESSANINI

2024/2025 シーズン  
新日本フィルハーモニー交響楽団 6月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #657 石川亮子	1
すみだクラシックへの扉 #24 小室敬幸	7
楽員ストーリーズ ④② 河村幹子(ファゴット)	13
NJP from Inside	14
2024/2025シーズン 定期演奏会プログラム	16
NJP 9月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	19
お客様からの声	21
室内楽シリーズ	23
「パトロネージュ・システム」のご案内	30

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。



〈コンサートの感想をお寄せください〉

演奏会終了後1週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルよりグッズをプレゼント!

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。



@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願いいたします。

<https://forms.gle/pgWSTF1gooyVLG9t8>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

〈ご来場のお客様へのお願い〉



Triphony Hall Series  
Suntory Hall Series  
2024-2025 Season  
#657

6.8 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団  
トリフォニーホール・シリーズ 第657回定期演奏会  
2024年6月8日(土) 14時00分  
すみだトリフォニーホール

6.11 [火]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団  
サントリーホール・シリーズ 第657回定期演奏会  
2024年6月11日(火) 19時00分  
サントリーホール

●ハイドン (1732-1809)

交響曲第104番 ニ長調 Hob.I:104「ロンドン」

約30分

Joseph Haydn: Symphony No. 104 in D major, Hob.I:104, "London"

- I. Adagio - Allegro
- II. Andante
- III. Menuetto: Allegro
- IV. Finale: Spiritoso

—— 休憩20分 ——

●ストラヴィンスキー (1882-1971)

バレエ音楽『ペトルーシュカ』(1911年原典版)\*

約35分

Igor Stravinsky: Petrushka (1911 version)\*

- I. 謝肉祭の市場 The Shrovetide Fair
- II. ペトルーシュカの部屋 Petrushka's Room
- III. ムーア人の部屋 The Moor's Room
- IV. 謝肉祭の市場(夕方) The Shrovetide Fair (Evening)

●ラヴェル (1875-1937)

『ダフニスとクロエ』第2組曲

約30分

Maurice Ravel: "Daphnis et Chloé" Suite No. 2

- I. 夜明け Lever du jour
- II. 無言劇 Pantomime
- III. 全員の踊り Danse générale

[指揮] シャルル・デュトワ

Charles Dutoit, Conductor

[ピアノ] 阪田知樹\*

Tomoki Sakata, Piano\*

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙/西江辰郎

Munsu Choi & Tatsuo Nishie, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催: 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催: すみだトリフォニーホール [6/8公演]

■助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))  
独立行政法人 日本芸術文化振興会  
公益財団法人 アフィニス文化財団

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。  
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは  
こちらから

<https://forms.gle/pgWSTF1gooyVLG9t8>





©Chris Lee

シャルル・デュトワ [指揮] Charles Dutoit, Conductor

今日最も人気のある指揮者の一人。ローザンヌに生まれ、現地やジュネーヴで学び、大指揮者アンセルメやミュンシュに師事、1964年にベルン響を指揮してデビューした。以降、欧米の主要楽団を多く指揮し、特に25年にわたるモントリオール響との活動は特筆される。同団を「フランスのオケ以上にフランス的」という評価を得るまでの超一流に成長させ、一躍デュトワを世界の寵児に押し上げた。フランス国立管、フィラデルフィア管などのポストも歴任。1996年からはN響常任指揮者、98年から同団音楽監督を務め、2003年から名誉音楽監督。札幌のPMFや宮崎国際音楽祭の芸術監督も務めた。2018年にはサンクトペテルブルク・フィルの首席客演指揮者に就任。

シカゴ響、ボストン響、ニューヨーク・フィル、ベルリン・フィル、バイエルン放送響をはじめ、主要音楽都市のオーケストラに定期的に招かれ、色彩的で愉悦のリズムあふれる魅力的な演奏を披露、フランス音楽をはじめ、ストラヴィンスキーやメシアン、近代のバレエ音楽などの真髄を深いレベルで聴衆に伝えている。各地での勲章や博士号の授与も多い。録音の数は200以上に上り、2度のグラミー賞をはじめ数々の栄誉に輝いている。



©Ayustet

阪田知樹 [ピアノ] Tomoki Sakata, Piano

2016年フランツ・リスト国際ピアノコンクール第1位、6つの特別賞。2021年エリザベート王妃国際音楽コンクール第4位入賞。東京藝術大学を経て、ハノーファー音楽演劇大学大学院ソリスト課程に在籍。

第14回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにて弱冠19歳で最年少入賞。ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリ、聴衆賞等5つの特別賞、クリーヴランド国際ピアノコンクールにてモーツァルト演奏における特別賞、キッシンゲン国際ピアノオリンピックでは日本人初となる第1位及び聴衆賞。国内はもとより、世界各地20カ国以上で演奏を重ね、国際音楽祭への出演多数。2015年CDデビュー、20年3月、世界初録音を含む意欲的な編曲作品アルバムをリリース。また、阪田知樹ピアノ編曲集『ヴォカリーズ』、『夢のあとに』、阪田の作曲した『アルト・サクソフォーンとピアノのためのソナチネ』を音楽之友社より出版。2017年横浜文化賞文化・芸術奨励賞、2023年第32回出光音楽賞、第72回神奈川文化賞未来賞を受賞。

今年3月23日、マウリツィオ・ポリーニが亡くなった。享年82歳。ポリーニは私にとって唯一無二のピアニストだった。バッハとベートーヴェンばかりを弾かされていた中学生のある日、1960年のショパン国際ピアノコンクールで優勝後、長い沈黙を経てリリースされたというアルバムを聴いた。ストラヴィンスキーの「ペトルーシユカからの3楽章」。これは一体!?!ポリーニが真に偉大であったのは、過去の伝統的なレパートリーだけでなく、同時代すなわち20世紀の音楽を積極的に演奏し続けたことにある。同じ時代の空気を吸って生まれた音楽を、未来へと残していくこと。ポリーニのいない世界で、ポリーニがみせた音楽家としての生き様を私はずっと忘れない。

■ハイドン：交響曲第104番 二長調 Hob. I-104「ロンドン」

幸福な英国滞在最後の交響曲 ▶

番号付けされたもので104曲を数える交響曲を書いた、古典派における「交響曲の父」ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)。1790年に約30年間仕えたアイゼナハのエステルハージ侯爵家をひとまず離れることになったハイドンは、ロンドンで定期演奏会を主催するザロモンの招きによって、1791~92年、1794~95年の2度にわたりイギリスに滞在。この時に書かれた12曲の交響曲のうち、第104番はその最後を飾る、そしてハイドンの作曲した最後の交響曲となった。

イギリスでの日々を「一生で最も幸福な時期」と語ったと伝えられるハイドン。第104番の交響曲は、急・緩・メヌエット・急の典型的な4楽章構成によるが、どの楽章も充実した書法とハイドンらしい創意にあふれている。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

**第1楽章**はアダージョの壮大な二短調の序奏付き。それが半終止すると、アレグロのソナタ形式による二長調の主部がのびやかに開始される。

**第2楽章**は変奏曲風のおだやかな緩徐楽章。しかしながら中間は、疾風怒濤時代のハイドンを彷彿とさせる短調の激しい音楽となる。

**第3楽章**はアレグロの快活なメヌエットで、のどかなドイツ舞曲風のトリオをはさむ。

**第4楽章**はソナタ形式によるフィナーレ。ホルンとチェロによる主音(レの音)保続の上に、第1主題(クロアチア民謡に基づくとも言われる)が奏されて始まり、最後のコーダまで勢いよく駆け抜けていく。

[楽器編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

## ■ ストラヴィンスキー：バレエ音楽『ペトルーシュカ』（1911年原典版）

ロシア・バレエ団が  
生んだ傑作 ▶

20世紀初頭のパリでセンセーショナルな話題をさらったのは、ロシアの興行師ディアギレフが主宰するバレエ・リュス（ロシア・バレエ団）の公演だった。団としての活動は、第一次世界大戦をはさんだ1909～29年の20年間。そのなかで同じロシア出身のイーゴリ・ストラヴィンスキー（1882～1971）は、『火の鳥』（1910年初演）、『ペトルーシュカ』（1911年初演）、『春の祭典』（1913年初演）のいわゆる三大バレエをはじめ、その後も『プルチネッタ』や様々な作品の音楽を書き続けていった。

作曲の経緯 ▶

『ペトルーシュカ』が生まれたきっかけについて、ストラヴィンスキーは後に、『春の祭典』の実現には時間がかかるだろう、ならば「ピアノが主要な役割を果たす管弦楽曲、つまり一種の協奏曲を書いて気晴らしをしよう」と思ったと語っている。操り人形がオーケストラに対決を挑み、乱闘の末にみじめに敗北する一。作曲中に突如として浮かんだイメージから、ストラヴィンスキーは楽曲を「ペトルーシュカ」と命名。滞在先のスイスを訪れたディアギレフに聴かせると（それが現在の第2場にあたる）、ディアギレフは即座にバレエ化を決意。プノワの協力のもと作成された台本に基づいて、1幕4場のバレエ『ペトルーシュカ』が完成された。ロシア民謡を多数取り入れ、めまぐるしく変化する拍子とリズム、金管楽器と打楽器を多用した色彩豊かな響きが一体となった音楽は、まさにストラヴィンスキーの独断場と言える。

各曲のストーリーと  
特徴 ▶

**第1場：謝肉祭の市場** 1830年頃帝政ロシア時代のペテルブルク。祭りの喧噪からは、手回しオルガンのメロディーも聞こえる。魔術師がペトルーシュカ、バレリーナの少女、ムーア人の3体の人形に命を吹き込むと、人形たちは激しく踊り出す（ロシアの踊り）。

**第2場：ペトルーシュカの部屋** 魔術師から邪険に扱われ、恋するバレリーナの少女にも相手にされないペトルーシュカ。人間の心を持った人形ペトルーシュカの嘆きや憤りが、複調（例えば、ハ長調と嬰へ長調が同時に鳴らされる）でグロテスクに表現される。

**第3場：ムーア人の部屋** 暇をもてあますムーア人の部屋に、バレリーナの少女が登場。二人は意気投合しワルツを踊る（ランナーのウィンナ・ワルツからの引用）。嫉妬したペトルーシュカが乱入するも、ムーア人はペトルーシュカを踏みつけて追い出す。

**第4場：謝肉祭の市場（夕方）** 再び祭りのにぎわい。子守りの女、熊を連れた農夫、ロマの女、馬車の御者といった人々が次々と踊りを披露するなか、刃物を持ったムーア人に追われてペトルーシュカが飛び出てくる。刺されて息絶えるペトルーシュカ。魔術師がペトルーシュカはただの人形だと説

明し、ほっとした群衆が家路につくと、ペトルーシュカの亡霊が現われる。

[楽器編成]フルート4（ピッコロ2持替）、オーボエ4（イングリッシュホルン持替）、クラリネット4（バスクラリネット持替）、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、テナードラム、シンバル、吊しシンバル、タンバリン、トライアングル、タムタム、グロックンシュピール、シロフォン、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦楽5部。

## ■ ラヴェル：『ダフニスとクロエ』第2組曲

同じくディアギレフの  
企画により ▶

『ダフニスとクロエ』は『ペトルーシュカ』から約1年後、同じくディアギレフ率いるロシア・バレエ団によって1912年6月8日に初演された。ディアギレフがフランスの作曲家、モーリス・ラヴェル（1875～1937）に声をかけたのは1909年のこと。同年6月には、すでに振付師のフォーキンと台本の打ち合わせが始まっていたものの、作曲の遅れもあって初演は度々延期。なかでも最後の「全員の踊り」は、初稿から1年をかけて改訂が行われ、『火の鳥』や『ペトルーシュカ』の成功を横目に見ながら、ようやく1912年4月5日に作曲が完了したのだった。

原作からバレエに ▶

2～3世紀頃ローマ帝政下のギリシア語圏で書かれた、ロンゴスの恋愛小説『ダフニスとクロエ』が原作。レスボス島（エーゲ海の北東、トルコ沿岸に位置する）を舞台に、山羊飼いの青年ダフニスと羊飼いの少女クロエが出会い、恋に落ち、度重なる苦難を乗り越えて、最後は結ばれて幸せに暮らす一。ただしバレエ化に際しては、フォーキンの「古代趣味（アルカイスム）」と、ラヴェルの典雅な古代ギリシアのイメージが対立し、原作のエピソードは大幅に変更されることになった。1幕3場からなるバレエから、第2組曲は第3場の音楽をほぼそのまま用いたもので、ラヴェルの管弦楽作品としても傑作のひとつと高く評価されている。

各曲の特徴 ▶

「夜明け」のせせらぎが岩を流れ、空が白み鳥がさえずる美しく幻想的な情景を、ラヴェルは天才的なオーケレーションで描き出した。海賊に連れ去られたクロエ。ダフニスとクロエは感動の再会を果たす。

「無言劇」はパンの神とニンフ（精霊）のシリックスの物語を、ダフニスとクロエが無言劇（パントマイム）で再現する。パンの吹く葦笛の調べに乗って踊るシリックス。この場面は、1番の長いソロから続くフルート・セクションの聴かせどころとして名高い。

「全員の踊り」は歓喜の大団円。抱き合うダフニスとクロエ。若者たちも集まり、特徴的な3+2の5拍子によって熱狂的に締めくくられる。

[楽器編成]フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、アルトフルート、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、Es管クラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、テナードラム、シンバル、トライアングル、タンバリン、カスタネット、ハープ2、チェレスタ、ジュードゥタンブル、弦楽5部。

# 未来に、社会に。 豊かさを。

オリックスグループは「豊かな社会」を実現するために、  
社会福祉、青少年の育成、環境保全などの分野で支援活動を続けています。



児童養護施設などの子どもたちを、オリックス・パファローズの野球観戦にご招待しています。



世代を超えて地域の人々が子どもに食事や居場所を提供する「子ども食堂」への支援を行っています。



全国の肢体不自由児施設などに、車椅子でそのまま乗車できる福祉車両や送迎用の車両を寄贈しています。



オーケストラコンサートへのご招待企画を実施するなど、音楽の振興に資する活動を行っています。

©K.Miura



オリックス

SUMIDA  
TOBIRA of classic  
2024-2025 Season  
#24

6.21 [金] 22 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第24回

2024年6月21日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール  
6月22日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

●ガーシュウィン (1898-1937) (ベネット編)  
交響的絵画『ポーギーとベス』より 約15分  
George Gershwin (arr. by Robert Russell Bennett): A Symphonic Picture "Porgy and Bess", excerpts

●ガーシュウィン  
ラブソディ・イン・ブルー \* 約25分  
George Gershwin: Rhapsody in Blue \*

—— 休憩20分 ——

●マルケス (1950- )  
ダンソン・ヌメロ・ドス 約10分  
Arturo Márquez: Danzón No. 2 for Orchestra

●ガーシュウィン  
子守歌 約10分  
George Gershwin: Lullaby for String Orchestra

●ガーシュウィン  
パリのアメリカ人 約20分  
George Gershwin: An American in Paris

[指揮] ヤデル・ビニャミーニ  
Jader Bignamini, Conductor

[ピアノ] 小曾根 真 \*  
Makoto Ozone, Piano \*

[コンサートマスター] 西江辰郎  
Tatsuo Nishie, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞  
Mai Tategami, Assistant Concertmaster

- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))  
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないよう確かめください。  
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは  
こちらから  
<https://forms.gle/pgWSTF1gooyVLG9t8>





©Stefano Buldrini

### ヤデル・ビニャミーニ [指揮] Jader Bignamini, Conductor

デトロイト交響楽団音楽監督。2023/24年シーズンに3度目のフルシーズンを迎える。同シーズン、デトロイト以外ではロンドン・フィルハーモニー管弦楽団とベルゲン・フィルハーモニー管弦楽団へのデビュー、ウィーン国立歌劇場の『マノン・レスコー』とパリ・オペラ座の『アドリアーナ・ルクヴルール』の再演など果たした。

近年、アンナ・ネトレブコとユシフ・エイヴァゾフが共演したアレナ・ディ・ヴェローナでの『トゥーランドット』凱旋公演と、ローマ歌劇場の来日公演でソフィア・コッポラ演出による『椿姫』を指揮している。

2015年には、ミラノ・スカラ座フィルにコンサート・デビューを果たしている。

2010年にリッカルド・シャイーよりミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ交響楽団のアシスタント・コンダクターに指名され、その後レジデント・コンダクターとなり、指揮者としてのキャリアを歩み始める。北イタリアのクレマ生まれ。ピアチェンツァ音楽院で学んだ。



©Kazuyoshi Shimomura

### 小曾根 真 [ピアノ] Makoto Ozone, Piano

1983年バークリー音大を首席で卒業。同年米CBSと日本人初のレコード専属契約を結び、全世界デビュー。2003年グラミー賞ノミネート。

ゲイリー・パートン、バキート・デリヴェラ、ブランフォード・マルサリス、チック・コリアなど、世界的なプレイヤーとの共演や、ビッグバンドとの活動など、ジャズの最前線で活躍。また、NYフィル、シカゴ響、サンフランシスコ響、デトロイト響、NDRエルブ・フィルなど国内外のトップオーケストラとも共演を重ねる。

2021年には還暦を迎え、「OZONE 60」と題したプロジェクトを、全国47都道府県で展開し話題を集めた。2022-23年はリーダーを務めるビッグバンドNo Name Horsesのベスト盤“THE BEST”をリリースし全国ツアーを催行。現在、「From OZONE till Dawn」と題した若手音楽家の育成プロジェクトにも取り組み、新しいトリオ“Trinifinity”を結成するなど、国内外での活躍を始動している。平成30年度紫綬褒章受章。

オフィシャル・サイト <http://makotoozone.com/>

ジョージ・ガーシュウィン(1898~1937)とは一体、何者なのか?彼はまず即興の得意なピアニストであった。ガーシュウィンが14歳から習ったピアノの恩師チャールズ・ハンピッツァーの証言によれば、青少年の頃から既にジャズに興味を持っていたようである。15歳になると高校を中退して、楽譜販売店でソング・プッラガー(楽譜をピアノで試奏して客に紹介するデモンストレーター)として働き始めた。こうして当時流行していたラグタイムを弾いたり、仕事の一環としてミュージカルを聴いたり、大量の流行音楽を吸収。この経験を活かしてピアノ曲やポピュラーソングを作曲してゆく。

最初の成功作となったのが「スワニー」(1919)で、この曲を気に入った当時の人気歌手アル・ジョルソンが自身の舞台上で歌ったことで大ヒット。クラシックの作曲家である前に、まずソングライターとして注目されるようになり、その能力が活かせるミュージカルの作曲家へと歩みを進める。初期の舞台作品で重要なのが、ガーシュウィン自身が「ジャズオペラ」と呼んだミュージカル『ブルー・マンデー』(1922)だ。オーケストレーションこそガーシュウィン自身ではなく第三者が手掛けているが、オーケストラのサウンドとジャズを見事に結びつけたことで、シンフォニックジャズの始まりに位置付けられる作品となった。

### ■ ガーシュウィン(ベネット編)：交響的絵画『ポーギーとベス』より

ガーシュウィンは1937年、脳腫瘍によって38歳で急逝してしまう。短い生涯ではあったが、(旧作の改訂版も含めると)30ほどの舞台作品を手掛けた。そのなかで最後の作品となったのが1934~35年に作曲されたオペラ『ポーギーとベス』だ。1920年代初頭のアメリカ南部を舞台に、ギャンプルで生計を立てるポーギーと、彼に匿われたことをきっかけに愛し合うようになった情婦ベスを軸に、貧しい黒人たちの生活を描く物語である。

よく演奏されるオペラの聴きどころを抜粋した組曲は2種類あり、ひとつは作曲家自身が編曲した「キャットフィッシュ・ロウ」(1936年初演)で、第3曲「フーガ」に代表されるように先鋭的な不協和音をもつ楽曲が含まれているのが特徴だ。もうひとつがガーシュウィンの仕事仲間ロバート・ラッセル・ベネット(1894~1981)による交響的絵画『ポーギーとベス』(1943年初演)で、指揮者フリッツ・ライナー(1888~1963)の意向が反映されており、聴きやすい楽曲が(ベネット自身の説明によれば11曲)抜粋されている。

[楽器編成]フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、サクソフォン3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ドラムス、チャイム、トライアングル、シロフォン、ウッドブロック、小太鼓、グロックンシュピール、吊しシンバル、大太鼓、ハーブ2、弦楽5部。

## ■ ガーシュウィン：ラブソディ・イン・ブルー

1924年1月4日付けのニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙に掲載されたポール・ホワイトマンの2月12日のコンサートに関する記事のなかで、「ジョージ・ガーシュウィンがジャズ協奏曲を作曲中」という文章をガーシュウィン兄弟が目にした。その時点で本当は作曲を依頼されていなかった（もしくは依頼を忘れていた）というエピソードは「ラブソディ・イン・ブルー」をめぐる有名な伝説のひとつだ。

当時のジャズは踊れるように一定のテンポを保つ必要があると思われていたが「この誤解を一撃で打ち砕く」という目標が創作意欲をかきたてたと作曲家自身は語っている。当初はアメリカン・ラブソディーという題名を予定していたが、兄アイラのアイデアによって現在のタイトルに落ち着いた。画家のジェームズ・マクニール・ホイッスラー（1834～1903）による色彩と音楽用語を掛け合わせた絵画のタイトルを真似たのだという。

ガーシュウィン自身によれば18日間（後にはより大袈裟に“10日間”と発言）で2台ピアノのスコアを完成させ、管弦楽（といっても初演はポール・ホワイトマン・オーケストラなのでビッグバンドに近い編成）への編曲はホワイトマンの雇っていたアレンジャーのファーディ・グローフェ（1892～1972）が担当した。現在演奏されているバージョンは、グローフェがオーケストラのために編曲し直した1926年のバージョンに出版社の編集者が一部改訂を加えた版である。

[楽器編成]ピアノ独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、サクソフォン3（アルト2、テナー）、ホルン3、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、ゴング、ドラムス（大太鼓、小太鼓、吊しシンバル）、グロッケンシュピール、弦楽5部。

## ■ マルケス：ダンソン・ヌメロ・ドス

指揮者グスターボ・ドゥダメル（1981～）とシモン・ボリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラ（現：シモン・ボリバル交響楽団）がドイツ・グラモフォン社からデビューアルバムを発売したのは2006年のこと。その翌年に行われた欧米ツアーで演奏されて一躍有名になった楽曲がアルトゥロ・マルケス（1950～）の「ダンソン第2番」（1994）だ。今や世界中のオーケストラが取り上げるレパートリーになりつつある。

メキシコ生まれのマルケスはカリフォルニアやパリでも音楽を学び、当初は前衛的な作品を書いていた。だが1988年に「ピアノのための『エン・クラベ En Clave』を作曲したことで、音楽と芸術へのまなざしが完全に変わった」と彼自身が語っているように、作風が転換。1990年にダンスグループのメンバーとなったマルケスは踊れる音楽を書き始める。

そこで出会ったのが社交ダンスで踊られていたダンソン（コントルダンスとその派生であるハバネラから発展したキューバやメキシコのダンス）であった。まずは電子音を使って「ダンソン第1番」（1990）を作曲し、管弦楽版もマルケス自身によって作られる。こうして2017年に作曲された第9番まで続く、ダンソンシリーズが生まれた。最大のヒッ

トとなった第2番はメキシコ国立自治大学のフィルハーモニー管弦楽団からの委嘱作で、メキシコの先住民たちが白人中心の価値観に抗おうとした1994年1月の「サパティスタの反乱」に共感したマルケスの思いが込められている。基調となるのはクラベと呼ばれるラテンアメリカ（中南米）のダンス音楽で使われる特徴的なリズム。拍子木のような打楽器クラベス（クラベの複数形!）によって繰り返されてゆく。

[楽器編成]フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、クラベス、小太鼓、吊しシンバル、ギロ、トムトム、大太鼓、ピアノ、弦楽5部。

## ■ ガーシュウィン：子守歌

『ポーギーとベス』を代表するアリア「サマータイム」も子守歌だったが、実はクラシックの作曲を勉強していた1919～20年頃にも「子守歌」という弦楽四重奏曲が作曲されている。ガーシュウィンが和声や対位法を習っていたエドワード・キレーニ Sr.（1884～1968）は1908年にハンガリーからアメリカに移り住んだヴァイオリニスト・作曲家で、短期間ではあるがマスカーニにも師事していたという。キレーニのもとで弦楽四重奏を作曲するための訓練として書かれたのが「子守歌」であると推測されている。当時、仲間内で何度か演奏されただけでなく、1922年の『ブルー・マンデー』のなかにこの曲の主旋律が取り入れられているのが興味深い。

[楽器編成]弦楽5部。

## ■ ガーシュウィン：パリのアメリカ人

ガーシュウィンは「ラブソディ・イン・ブルー」の初演に感銘を受けた指揮者ウォルター・ダムロシュ（1862～1950）から、新たなピアノ協奏曲の作曲を依頼される。忙しい合間を縫って管弦楽法を勉強し、今度は自らオーケストラスコアを完成させることが出来た。こうしてよいよガーシュウィンは、クラシック音楽の世界へと本格的に乗り込んでゆく。

1928年にヨーロッパを訪れた際、ガーシュウィンはもっと学びたいと考えていたが、ラヴェルやナディア・ブーランジェには才能を潰してしまうことを危惧されて弟子入りを断られた。だが様々な作曲家と交流。特にアルバン・ベルク（1885～1935）と彼のオペラ『ヴォツェック』（1925年初演）に魅了されたことで、ガーシュウィンの音楽に複雑な和音が持ち込まれるようになる。パリから持ち帰ったタクシーのクラクションを取り入れた本作もそのひとつだ。「パリを訪れたアメリカ人が街を散策し、様々な街のノイズに耳を傾け、フランスの雰囲気魅せられてゆく印象を描写する」のが目的だったのだと作曲者は語っている。

[楽器編成]フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、サクソフォン3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、トムトム、ウッドブロック、タクシーホーン、グロッケンシュピール、シロフォン、チェレスタ、弦楽5部。